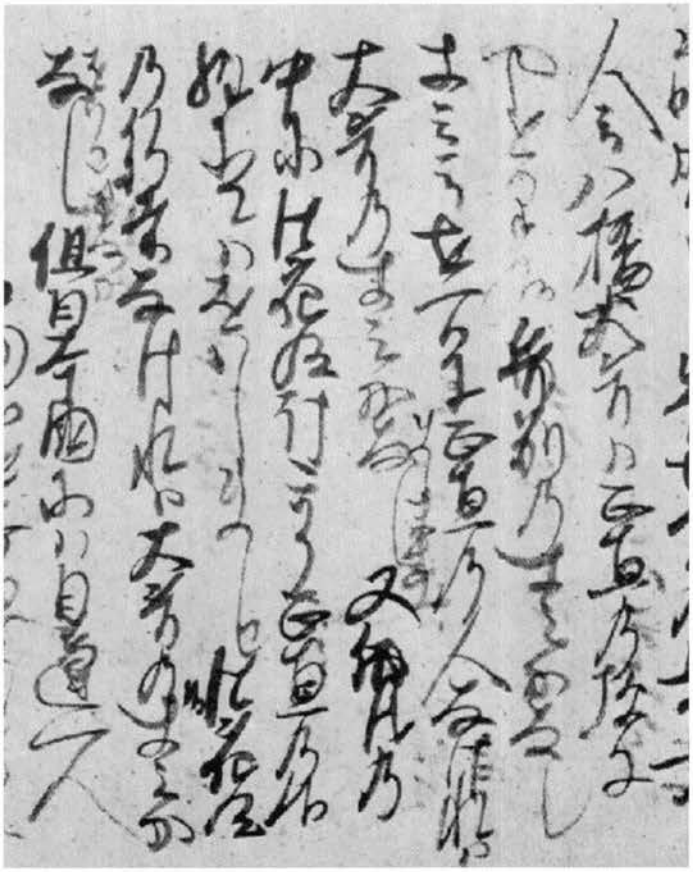
今月の御聖訓



【人云、】八幡大菩薩は正直の頂(かうべ)にやどり給、別のすみかなし等云云。世間に正直の人なければ大菩薩のすみかなし　ましまさず。又仏法の中に法華経計こそ正直の御経にてはをはしませ。法華経の行者なければ、大菩薩の御すみかをはせざるか。なし【但日本国には日蓮一人】

【法門申さるべき様の事　全集一二七二頁】

目　次

今月の御聖訓

新春所感……菅野憲道　1

新年の挨拶……3

宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修……5

【御大会式講演】生老病死の人生を生き抜く覚悟を決める……坂口麗道　6

【カメラ・アイ】御大会式……10

御書と日興上人〔199〕……松田銘道　14

読書案内『国語辞典を食べ歩く』……松田銘道　16

【投稿】「盂蘭盆会に参詣して」……森　秀之　17

恵日だより……19

一月の行事　睦月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　題字：立正安国論より拝写

新春所感

菅野憲道

明けましておめでとうございます。

逝く年、来る年、時の流れは川のように止まる事を知らない。眼を閉じて低頭すれば、塵芥とともに流したはずの記憶のかけらから、別れを惜しむ機会もないまま不帰の客となった多くの知人への思いがフッと浮かび、人の世のはかなさに嘆息することとなる。現存する知人より幽冥境を隔てた知人のほうが多数になってしまった今、いずれ彼等と同じく帰らざる道を歩むことになる。さすれば残された日々をいかに悔いなく過ごし、平常心を持って終末を迎えるかという課題も残される。

後期高齢の療養者である小生のお正月は、大きな夢や明るい未来などといってもしっくりこない。たとえ名前など忘れた知人でも、順逆を問わず、縁のあった人すべてに、心静かに一返のお題目を手向けることができれば、その方が「如法めでたく候」だと、勝手に決め込んでいる。

科学技術の発展によって世界はますます狭くなり、人類はいっそう相互依存の度を深めつつある。ヒトは自身だけで自己完結して生存しているわけではない。一切衆生・大自然と二而不二にして、当体そのものだ。環境破壊に無関心な企業家や、核爆弾をちら付かせる国家権力者など狂気の沙汰だ。これこそ人類の生存をおびやかす愚行であり、ひいては自己否定につながる破滅の思想であり、因果関係を弁えない愚人の外道見でもある。　新年がめでたい歳になるかどうかは、人の心一つにかかっている。『心の師とはなるとも心を師とせざれ』という聖祖の教えを肝に銘じて、心身ともに健康で有意義な年となるよう、仏道修行に精進したいものです。

謹賀新年

令和七乙巳年（きのとみ）

年頭の挨拶

講頭　森　秀之

令和7年新年明けましておめでとうございます。新春を寿ぎ源立寺法華講の皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

何としても自行として源立寺法華講の一人一人が大聖人様のご精神の建立を異体同心に信心決定を目指し、微力ながら益々のご奉公に努めて参ります。本年もよろしくお願い申し上げます。

源立寺法華講としては、僧俗一心で信心道場である新寺建立に取り組んでいます。引き続き物件等の情報をお願い申し上げます。

昨年を振りかえって、私が感ずることは、政治関係では、既存大手マスコミがあまり取り上げなかった東京都議選での石丸現象、衆議院選挙での国民新党躍進現象、兵庫県知事選挙での斉藤知事現象（ＮＨＫ党の立花党首戦略）等のＳＮＳ戦略による国民がインターネットによる情報収集によってテレビ離れが顕著となりました。従来のマスコミ、新聞媒体の主導による報道の信頼性欠如を感じた国民とテレビ、新聞しか見ない高齢者等と二極化していると感じます。

その中で日本国自体もサンフランス講和契約で米国から独立したとはいえ、まだまだ米国に一部支配されていることにも気づき、また国会、地方議会による旧態依然として体制の浮き彫りが見えてきた国民の１％～２％が自主的に目覚めたような感じがします。目覚めた人たちが、今後国民運動となって特に国防、パンデミックよるワクチン反対運動、移民問題、カルト宗教問題、少子高齢社会、人口減少は他人事ではなく、先送り出来ない直面している課題、直面している現実であると目覚め、本来の民主主義とは何か？と気づき始めた年になったのではないかと私は感じます。

正しい信仰を求めている私たちはますます信心修行をする意義を日々見つめ直して精進しなければならないと感じます。

私たちは四十数年前から正信覚醒運動を通して宗派間での論争の中で、本来の富士門流の正しい信仰を求めてきた歩みは誇りであり、これからも一人々々が目覚めて自発能動的に求め続けていくことが肝要であると思います。

「涅槃経に云わく『一切衆生の異の苦を受くるは、ことごとくこれ如来一人の苦なり』等云々。日蓮云わく、一切衆生の同一苦は、ことごとくこれ日蓮一人の苦なりと申すべし。」

諫暁八幡抄からの一節です。

この大聖人様の強い慈悲心こそが私たちの目指すべき信心修行であると覚悟して、今後もますます手続の師・菅野ご住職と共に、信心修行に励むことをお誓いし年頭の挨拶を申し上げます。

新年の挨拶

大阪地区　寺川　春美

令和七年、明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、新たな志を以って、清々しく新年をお迎えのことと、お喜び申し上げます。

昨年は元旦早々から能登半島地震、八月には日向灘地震があり、いよいよ南海トラフ地震かと震撼しました。政治の世界では自民党の裏金問題が取り沙汰されましたが、未だに解決には至らず黒い影を残しています。一方スポーツの世界では、パリオリンピックでの日本の活躍や野球界では大谷選手の目覚ましい大活躍が連日報じられていました。また被団協のノーベル平和賞受賞と、光と影が混在する年となりました。

いつの世も転変地夭は無くすことはできないとされていますが、昨今の異常気象は人間が便利な暮らしを追求し、徐々に作り上げられた結果が要因の一つとされています。一人ひとりが子供や孫またその子々孫々に心豊かな生活が叶うよう、今自分達が心して生きていかなければならない時代だと思います。

今年は私にとりましては無事に六回目の周り年を迎える年となり感謝していますが、世の中は決して安定した情勢とは言えない状況です。

よからんは不思議、悪からんは一定とをもへ。ひだるしとをもわば餓鬼道ををしへよ。さむしといわば八かん地獄ををしへよ。をそろししといわばたかにあえるきじ、ねこにあへるねずみを他人とをもう事無かれ。

（聖人御難事　全集一一九〇頁）

この大聖人様のお言葉を意に染め、「南無妙法蓮華経」と精進し、この年が嵐の前の静けさにならないよう日々強く祈ります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

日蓮大聖人の常住不滅を祝い

宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修

宗祖日蓮大聖人御大会式が、十一月九日（土）の御逮夜法要、翌十日（日）の御正当会の両日、法華講・檀信徒が集い厳粛裡に奉修されました。

法華講の皆様により御宝前が荘厳に飾り付けられ迎えた九日の御逮夜では、立正安国論（住職）、大聖人申状（大橋一法執事）奉読の後、法華講有志により、日興上人（森秀之講頭）、日目上人（新谷信子さん）、日道上人（井元恵子さん）、日行上人（平井勝男さん）と、申状が朗々と奉読されました。読経終了後、菅野ご住職の挨拶に続いて、大橋一法執事より、ご講演をいただきました。

翌十日の御正当会では、早朝から準備のために婦人部、地区役員、幹事、有志の方々の協力により、テントの設営、ご供物の準備などが行われ、あわせて受付、台所など裏方の用意も終え、教区ご僧侶の到着と法要を待ちました。

御正当会は、午後二時、出仕鈴によりご住職、教区ご僧侶が出仕・着座されて始まり、始めにご住職が献膳され、読経・焼香・申状奉読と如法に進められ、終了後、伝正院住職・坂口麗道師により、「生老病死を生き抜く覚悟を決める」ことの大切さ（次頁から掲載）のご講演をいただきました。

講演の後、お花くずしが行われ、御大会式は滞りなくすべて終了しました。

御会式にあたり、諸準備にご協力いただいた法華講の皆様にはありがとうございました。

【お会式講演　要旨】

生老病死の人生を生き抜く覚悟を決める

～他人の幸せを願い、全てに感謝の題目を～

伝正院住職　坂口麗道

本日は、源立寺様の御会式誠におめでとうございます。

私は、大阪市内の東成区で奉公させて頂いております、坂口麗道と申します。

なぜ、おめでとうと申すのか、私が自分の寺で、御信者さんに話しているままに述べます。

宗祖は、弘安五年十月十三日に御入滅なされました。肉体の宗祖は御入滅されましたが、その瞬間からお立場が変わります。ご存命の時は、直接伺わなければお会い出来ない立場ですが、御入滅なされますと時空を越えて我々が信仰でお目にかかりたい時にお会い出来る状況に変わられたのです。法華経の壽量品に出ております様に、御本佛として我々が恋慕する時にはお会い出来るのです。先ほど、時空を越えてと申しましたが、時（とき、時代が変わろうともお会い出来る。）、空（くう、どんな所にいてもお会い出来る。）というお立場です。私達は、信ずる・信仰によって、いつまでも身近に感じる事が出来ます。譬えば、母親と父親です。私は、大分前に亡くなった親の息遣いを感じますし、こんな時はこんな事を言うだろうと分かります。今も、自分の事を思い、心配してるだろうと感じ、もっと頑張ろうと思います。

我々は、縁あって宗祖の教えを信じ、宗祖の大慈大悲を感じて毎日信心して手を合わせているのですから、まして妙法に南無（命を捧げる）と約束した立場になっている訳ですから、宗祖を身近に感じる事が出来るのです。出来なければ、なかなかこの信心に喜びを感じないと思います。

と言う意味で、宗祖の御入滅をおめでとうと言うのです。

それでは、今日のお話に入ります。

まず、大聖人の御一生を振り返って、大聖人をどのように拝していけば我々の信仰が間違いのない信仰になるのか、を考えて見たいと思います。

私も僧侶になって五十八年経ちますが、年齢とともに大聖人の捉え方が変わってきているように思います。

今大聖人以上の七十四歳になって、なぜ大聖人が若い時から命を懸けて、この仏法のために命までも投げ出そうとなさったのかと、考えたりするのです。今日はその話をしてみたいと思います。

では、宗祖時代と御一生をカンタンに振り返ってみます。

鎌倉時代当時、仏教が日本に伝来して七〇〇年、お寺が建ち並び、大勢の僧侶が生まれる中で、八宗・十宗の宗派に別れ、「自分のところの仏さんが最高だ」「自分の信じるお経が最高だ」と争い、混乱していました。国内では大地震が起き、飢饉や疫病が蔓延し、武士は権力を争ってあちこちで殺し合いを行い、人々は苦しみ死んでゆく地獄さながらの現状でした。

幼少の頃より仏教に興味を持たれていた宗祖は、子供心に、「仏法が日本に伝わっていながら、人々が幸せになれないのは何故だろうか」「この末法という混乱した時代に、仏様はいったいどの教えを選び、どのような信仰をしろと仰せなのだろうか」と疑問を抱かれ、仏の真意を求め始められたのであります。八歳で地元の清澄寺にあがり、十六歳で出家し、

十八歳から諸国を回られ、各宗派の主張を聞かれ、大寺院に所蔵された、仏の残された一切のお経を読まれました。そして、仏様の真実のお経に行き着かれたのであります。

「末法の衆生にとって、成仏がかなうお経は法華経だけである。そのお題目を身・口・意で唱える強盛な信心によってこそ即身成仏ができるのだ」

と確信されました。「身・口・意」の「身」とは我が身の振る舞いのこと、「口」とは我が口に出して言うこと、「意」とは我が心の底から思うこと、であります。

宗祖は、

「末法においては、法華経以外のお経は仮の教えに過ぎず、それらの教えを信仰することは仏の真意に背く謗法である」

と仰せになり、また、

「法華経の中に、『末法時代において、この妙法を弘める人は大変な難に出会

う』と説かれているが、自分こそがその立場である」

として、末法における法華経の行者であると自覚しておられます。

こうして宗祖は、妙法を信じて生きることに対して、覚悟を決めておられました。

「不自惜身命」、自らの身命を惜しまない。

「死身弘法」、我が身は死んでも法を弘める。

「我不愛身命　但惜無上道」、自分の身や命より、最高の仏法を大事にする。

このように法華経に説かれているそのままに腹を決められて、その志のままに御一生を送っておられます。

つまり宗祖は、艱難辛苦の中にあって法悦を受け止める「心」を持っておられたのです。この心の姿勢を我々は学び、まねていかなければならないと思います。

世間の人は、お金が大事、健康が大事、長生きが大事と言いながら、必ず年をとって、病気になって、苦しみながら死んでいく。我々は、そんなものは最初から覚悟して、信心の心を持たなければ、大聖人のような覚悟がなければ、生きるのが段々辛くなってしまいます。

信心というのは、生老病死の人生を行き抜く大事な大事な覚悟を決める仏道修行、それが信心ではないかと思ったりしています。その覚悟がなければ現実に負けてしまうのではないかと思います。

宗祖は、『開目抄』の中で、

「我並びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穏ならざる事をなげかざれ。我が弟子に朝夕教へしかども、疑ひををこして皆すてけん。つたなき者のならひは、約束せし事を、まことの時はわするるなるべし。妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には、心とはなれしか、仏道のためにはなれしか。いつも同じわかれなるべし。我法華経の信心をやぶらずして、霊山にまいりて返りてみちびけかし」

（全集二三四頁）

と仰せであります。大変有名な御文ですね。

宗祖は竜口法難の首の座の後、厳しい寒さの佐渡ヶ島に島流しに遭われ、一見、進退窮まったと思われる状況の中、鎌倉の四条金吾殿を通して門下の弟子檀越へ出されたお手紙であります。

〝信ずること〟の反対の言葉は〝疑うこと〟ですね。末法においてこの妙法の信心をすれば必ず苦難に遭うと法華経に説かれており、それを知った上で信じていても、実際に苦難に遭うと、ついうろたえてしまうのが人間です。鎌倉時代当時、宗祖から直に教わっていたお弟子方ですら、宗祖に対して、妙法に対して疑いを起こし、宗祖やその教えを捨ててしまったのです。

法華経には「動執生疑（どうしゅうし

ようぎ）」が説かれています。これは、我見に執着する私たちを真実の法に導くため、仏様はあえて私たちに疑いを生じさせるのだということです。つまり、私たちが疑う心を持ってしまうのは、妙法に対する信心を仏様から試されているということではないかと思います。

信仰に対して、むしろ宗教そのものに対して、初めから心底信じろと言っても、それは無理なことです。誰だって最初は疑いの心を持つでしょう。それが自然なことですし、むしろ必要なことです。

天台大師は「無疑曰信（むぎわっしん）」、つまり「疑いが無くなった状態を信という」のだと仰せです。疑って、疑って、それでも自分の命に訴えるものが心に残った時、それが本当の信仰となるのです。疑いの心が生じた時こそ信仰を深める絶好の機会なのです。

たとえ天の加護が無かろうと、たとえこの世が安穏でなかろうと、どうかこの妙法の信仰と宗祖の説かれた教えを最後まで素直に信じてみて下さい。さすれば、その人は自然と仏界に至ることができると宗祖は仰せです。私はこの宗祖のお言葉を信じます。

誰だって迷うことや落ち込むことや嫌なことなど、人生多々あると思います。しかし、そういう時こそ、宗祖のこの慈悲あふれるお言葉を思い出して下さい。妙法の信心を疑わず貫いていただければ幸いです。

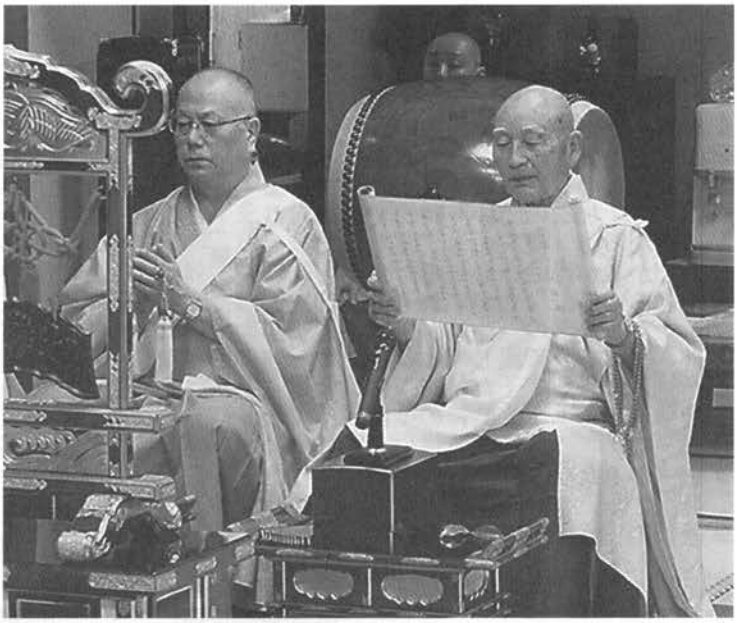
また、宗祖はこの『開目抄』で、「我並びに我が弟子」と並列に並べておられますが、それはなぜでしょうか？

それは「自分も自分の弟子も、諸難に遭うとも、疑う心を起こさなければ、自然に成仏ができる」という意味なのです。「自分のことはさておいて、お前達はしっかり信心しなさい」じゃないですね。宗祖の御心の中には、弟子もご自身も、信心修行に対して分け隔てがございません。宗祖の信心修行は、成仏することにおいては皆平等だからです。

逆に、もし信心が無ければ、疑う心があれば、在家も出家も、師匠でも弟子でも差別無く、成仏できないということです。

先ほどの『開目抄』には有難いことに、

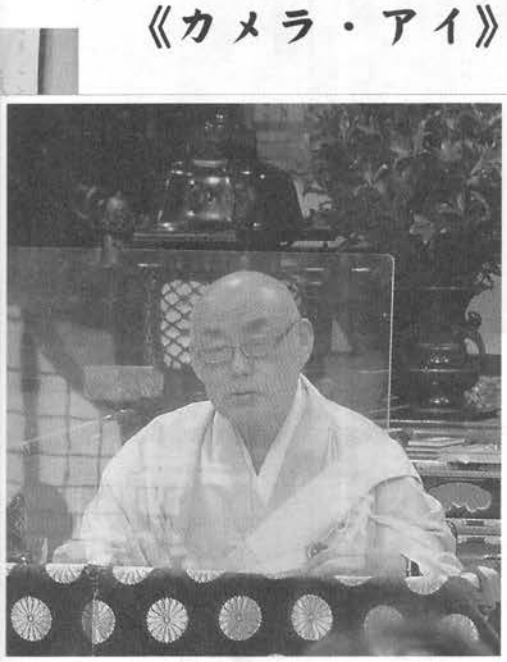
奉読されるご住職



大聖人の申状を奉読される藤村聴道師（法華寺先代住職）

式 ～

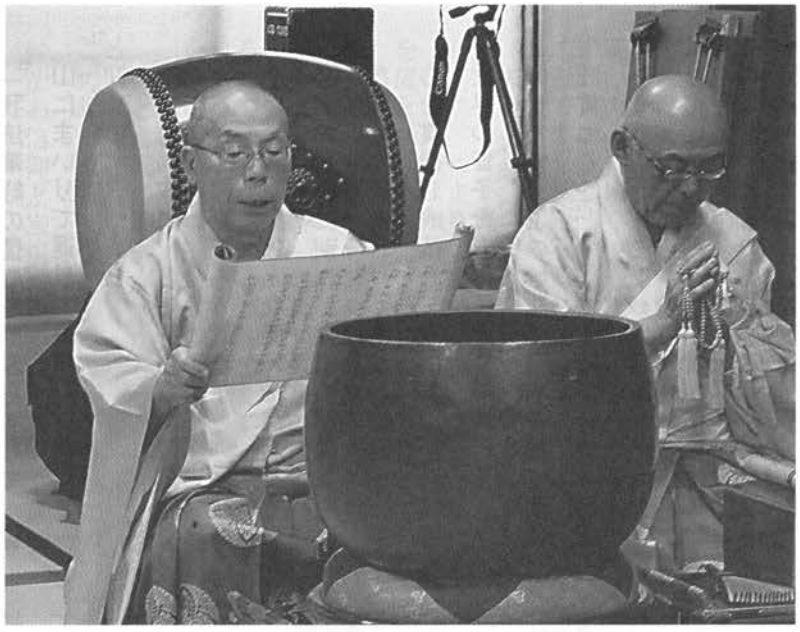
《カメラ・アイ》



御正当会で講演をされる
坂口麗道師（伝正院住職）

御逮夜で講演された
大橋一法執事

御逮夜では法華講員有志が申状を奉読



日有上人の申状を奉読される簗瀬明道師（聖道寺住職）

立正安国論

～ 令和六年度御大会

大掃除を行う法華講員

お花づくりの様子

お花くずしをもって
法要は滞りなく終えました

「我法華経の信心をやぶらずして、霊山にまいりて返りてみちびけかし」

と仰せです。つまり、

「法難の際に、妻子をとるか、仏法をとるかで悩むだろう。妻子との別れは辛いけれど、どんな深い縁があっても、必ずお互いに別れが来るのが現実なのだ。そうであれば、あなた自身が、信心を貫徹し成仏し、逆に霊山から娑婆世界の妻子を成仏に導くが良い」

と仰せです。この妙法の信心を捨てずに生涯貫ぬくことで、まずは自分自身が成仏を遂げ、それによって、あなたが大事にしている人をあなた自身が成仏に導けるのです。つまり、自力の信心の成仏もあるし、他力による成仏もあるのです。だけど、誰かが救ってくれるのを、ただ待つわけにはいきません。私たちは日々生きているわけですから、生きている以上、死を迎えるその時まで、命をかけて仏道修行をするだけです。

命がけほど強いものはありません。現に宗祖が御生涯を通してそのお姿を示しておられる通りです。信心に命をかける、つまり〝南無〟ということです。南無とは「我が命を捧げ奉る」との意味です。

先程の『開目抄』に、

「約束せし事を、まことの時はわするるなるべし」

とありました。どんな約束を宗祖と結んだかというと、「私は妙法蓮華経に自分の命を捧げます」、つまり、「南無妙法蓮華経」とお誓いし約束したのです。入信した時に誓い、約束をして、今もなお、お題目を唱え、御本尊様に毎日お誓いし約束しているのです。

日々の勤行唱題を通して、「自分は、宗祖と妙法に命をかけると約束して、今この信心をしているんだ」と、腹を決めて仏道修行に精進して下さい。

『開目抄』の一番最後は、

「日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には大楽をうくべければ大いに悦ばし」（全集二三七頁）

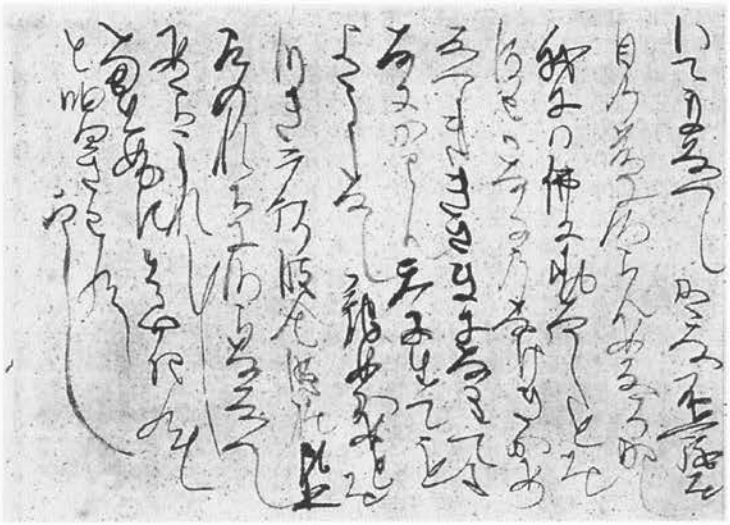
と、このように結んでおられます。

佐渡ヶ島に流罪になられ、いつ死ぬか分からぬ大変な状況の中で、「この流罪の苦しみはまだまだ小さい。最後には必ず成仏できるから悦ばしいことである」と、このようなお手紙を門下の方々へ送っておられます。

宗祖の、広くて深い大きな確信を持たれた信心を、自分の了見・我見で判断することはやめ、ただひたすらに人々の成仏と幸せを願われた宗祖の御一生に対して感謝していただきたいと思います。

自分の周りにいる人間を、競争相手や自分の出世の邪魔者としか見ないような生き方など捨てましょう。宗祖が示されたように、自分や家族を大事に思うように他人の幸せを願い、全てに感謝の念を抱きましょう。その感謝の言葉こそが「南無妙法蓮華経」のお題目であり、そのような題目が唱えられるようになれば、宗祖日蓮大聖人の門下の一人になれると思っております。

仏法を学ぶと、死んだら終わりではありません。世間の人は死ねば終わりだと思っていますが、決してそうではありません。過去世があり、現世があり、来世があります。死んだら何も無くなるわけではありません。どう生きたかが、次に生まれてくる元になるわけです。



「富木尼御前御書」第7紙
《末尾の4行》 あらうれしく
南無妙法蓮花経〈
と唱させ給へ
恐恐謹言

ですから、どんなに大変な状況にあっても、最後は大聖人のもとにいけるんだからと腹を決めてお題目を唱えて、できたら、「先に行って待ってるからしっかり信心してくださいね、今までありがとう」と死んで行ければいいなと私は思っています。

「後生には大楽をうくべければ大いに悦ばし」という気持ち、信心をしっかりと持って、この人生をコツコツと頑張って生きていかなければ良い人生を送れないのではないかと私は思います。

身口意で題目を唱えるということは、心でもそう思わなければいけない、振る舞いでもそういう振る舞いをしなければいけない、口だけで唱えていればいいというのではないのですね。

宗祖は、法華経を身で読むことを実践され、その所に「法悦」を感じておられました。我々は、素直に、前向きに、宗祖の仏法を「求めて」、「求めて」、「また求めて」、そうして初めて宗祖と同じ「法悦」を感じられると思います。

これからの皆さんの、ご自身の信心修行にかかっておりますので、どうか頑張って下さい。どうか、よろしくお願いいたします。

最後に、宗祖が富木常忍殿の奥方に与えられた、

「あらうれし、あらうれし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱へさせ給へ」

（『富木尼御前御書』全集九七六頁）

とのお言葉を胸に、法悦あふれるお題目を唱えて、精進して下さい。

いつも宗祖は見守って居られます。いつも励まして下さって居られます。ソバに受け入れる信心をして下さい。

ご清聴いただきまして有難うございました。

（以上）

【御書と日興上人（一九九）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一三三）

松田銘道

前回は、大黒喜道氏が「宗祖ご一代における妙法五字の内容的な変容について」（『c興風』三〇号）との論文から、「妙法五字」の「内実はさまざまに変わっていった」との考察に関して、「四、竜口法難でもたらされた『日蓮＝不軽菩薩』の自覚に伴う要素の付加」との項目についてみてきました。同論では、続いて、「五、上行菩薩の自覚を獲得する過程での要素の付加」との項目を設け、文永10年（1273）4月25日の『観心本尊抄』には宗祖の上行菩薩の自覚が示されている、との見解を示しています。

すなわち、前年の『開目抄』では、

「たった二度ほど、しかも『法華経』の教相上の話の中に地踊の菩薩たる上行に言及されているだけで、ある意味、その少なさに意外性を感じるほどである。」

と、上行菩薩への自覚はほとんど見られなかったのが、『観心本尊抄』では、

「特にその後半部分では上行＝地涌の菩薩がその論述の主役に躍り出ている感がある程である。但し、この小さからざる変化のみをもって、宗祖は上行菩薩の自覚に達せられたと断ずることは難しいと思われるが、少なくともそれまでに存在しなかった上行＝地涌の菩薩への関心が、宗祖の中で大きく膨らみ、一種特別な意味合いを持つようになったのは事実かと思われる。」

このように、『観心本尊抄』にて宗祖は、「上行＝地涌の菩薩」の自覚に「特別な意味合いを」を示されてることが確認できるとともに、その自覚によって「妙法五字」に、

❶「末法流布という要素」
❷「結要付属＝妙法という定義」
❸「本果ではなく本因へという眼差し」

以上の三つの要素が新たに見いだせる、との見解を示してしています。

❶については、

「末法の初めは謗法の国にして悪機なる故に、之れを止めて、地涌千界の大菩薩を召して、寿量品の肝心たる妙法蓮華経の五字を以て、閻浮の衆生に授与せしめたまふ。」

との一文に示されていて、それ以前には、

「『法華経』という経典の末法流布および利益については、いわゆる佐渡巳前にも少々散見されるが、題目五字の流布となればこの祖文が嚆矢ではないか、と思われる。」

と、妙法五字の流布の嚆矢、と指摘しています。

❷については、

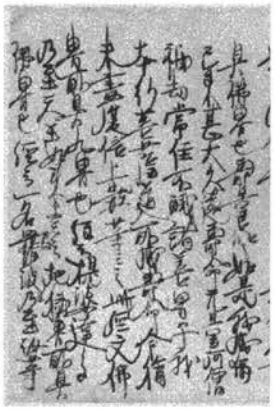
「是の如く十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の五字を属累して云く、経に云く…。」

との一文に示されていて、それ以前には、

「『結要付属＝五字』という定義は従来の解釈に無かったもので、宗祖が『本尊抄』で始めて表明された独歩の法門であるが、これもやはり釈尊よりの付属の問題ということで、上行菩薩の自覚にとっては必須の問題である。」

と、「結要付属＝五字の付属＝上行菩薩の自覚」が示されている、と指摘しています。

①5紙11行目～



②18紙15行目～19紙3行目

『観心本尊抄』（真蹟・中山法華経寺蔵）。

①五紙の「寿量品に云く・・・此の経文は仏界所具の九界なり」。

②十八紙～十九紙の「経に云く・・・今猶未だ尽きず、復上の数に倍せり」等云云。我等が己心の菩薩等なり。上行・無辺行・浄行・安立行等は、我等が己心の菩薩なり。」

以上のご文について、大黒氏は宗祖の「本果ではなく本因へという眼差し」が示されている、と指摘している。

❸については、

「①寿量品に云く『是の如く我成仏してより已来甚だ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず、復上の数に倍せり』等云云。此の経文は仏界所具の九界なり。

②経に云く『我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命は、今猶未だ尽きず、復上の数に倍せり』等云云。我等が己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり。・・・上行・無辺行・浄行・安立行等は、我等が己心の菩薩なり。

以上の二つのご文に示されていて、ここには、

「本因妙の経文＝九界＝上行等の四菩薩」という確認を示されている。」

と指摘しています。すなわち、②には、本因妙と上行菩薩との関係について、

「『地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり』とあるように、地涌の菩薩たちは基本的に久遠の釈尊の眷属＝弟子であり、本因妙も久遠の釈尊の本因妙であるというのが通途の解釈なのであるが、宗祖はそれを十分に認めた上で、尚且つ久遠の本因を釈尊ではなく上行等の四菩薩であると規定されているのである。」

と、宗祖は「上行等の四菩薩＝久遠の釈尊の弟子」との教相上の解釈を踏まえつつ、上行・無辺行・浄行・安立行等は、我等が己心の菩薩なり」と、「上行菩薩＝久遠の本因妙」と規定されている、と指摘しています。

それゆえ、❸の本因妙は、

「宗祖の上行菩薩の自覚を重視する立場からすれば、宗祖が言われる妙法蓮華経の五字が久遠の本果の釈尊の得分ではなく、あくまでも久遠の本因に根ざした妙法となる、という眼差しのイメージである。」

と、「末法流布の妙法五字」は「本果ではなく久遠の本因に根ざした妙法」と規定されている、と指摘しています。（続く）

月刊『栄養と料理』の連載「このコトバ、国語辞典に聞いてみよっ」の六年分を加筆修正してまとめたのが本書。

作業期間中に、明解国語辞典と明鏡国語辞典が改訂となり、その成果も本文に反映させたので、大変な作業となったが、その手間を惜しまなかったのは、「辞典は常に改訂を経て、その時点での最高傑作になっていること」、「表現が変わったり、意味がわったり、加わったり、日々、辞典を作っている人たちはあの項目はあれでよかったのかと、考えている」こと、そのことを読者に伝えたい想いがあったからだと。

しかし、その大変な作業も、出版記念のインタビューで、「これまでにとり上げた中で、調べてみたら意外におもしろかった、というような言葉はありますか」との質問に、

毎回おもしろくて、もう止まらなくなっちゃうんですよね。特に印象に残っているのは「チューインガム」かな。もはやだれも「チューインガム」なんて呼ばないけれど、ちょっと昔の文献を読めばたくさん出てくるし、もはや古風な言葉なので、どの辞典も入れないわけにはいかない。じゃあ、それをどうやって説明するのか。普通に考えると「噛むお菓子」とか「噛んで味がするお菓子」という説明になると思うんですけれど、『広辞苑』には「噛みつづけて味わう菓子」と説明してあった。噛み「つづけ」る！　確かにそうだよな、と思ったんですよね。言葉の説明のおもしろさについては『新明解国語辞典』が有名ですが、一見かたそうな『広辞苑』が、この項目ではものすごく頭を使ったくふうを入れ込んできている。おそらくふだんはあまり口にしないだろう食べ物に関しても、編纂者が考えに考えている様子が伝わってきておもしろかった。

と語っているように、楽しい時間であったことが知れる。

複数の辞書を食べ歩く醍醐味は、衣食住にまつわる言葉にあるという。日々の暮らしに関わる言葉は、はやり廃りも激しい。関連項目を引けば、編集者がどのような工夫を重ねてきたか、その変化が手に取るように伝わってくるのだと。

読書案内

松田銘道

サンキュータツオ著

『国語辞典を食べ歩く』

女子栄養大学出版部

定価一七〇〇円

【投稿】

盂蘭盆会に参詣して

大阪地区　森　秀之

8月15日盂蘭盆会に参詣する前に、偶然に創価学会系の池田家の墓というサブネイルの YouTube が目にとまり見てしまいました。

ある会員が池田会長が亡くなってお墓参りがしたいと学会本部へ会長の遺骨が何処に葬られているのか問い合わせをした内容でした。「池田家の事ですのでよくわかりません」との回答であったとの事で、現原田会長執行部と池田家（奥様、三男）と分断している状況の説明でした。

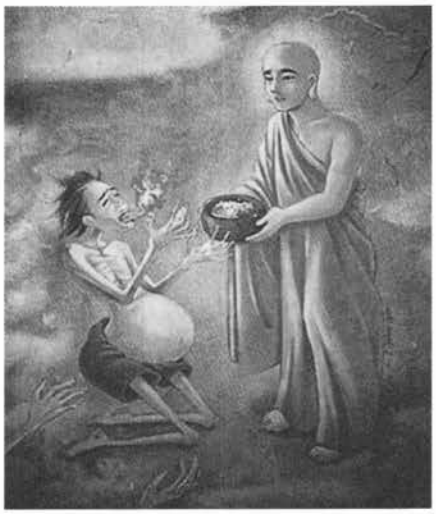
さらに池田家が所有しているお墓が五か所。①大田区の三厳寺、②鎌倉墓園、③高尾墓園（常修寺管理）、④大石寺墓園、⑤奈良法雲寺との事で、もし納骨するとすれば大石寺墓園に次男城久氏が納骨されている事が理由で推測されていました。

そうなるとそれはそれで、学会としては大変な問題になるのでは・・・と下世話な内容でしたが、ただよく調べているなあと感心し、何の縁でこの YouTube をみる事になったのかおもしろいなあと思って盂蘭盆会の参詣の途につきました。

盂蘭盆会の法要に参詣して、帰りにあるご夫婦を車で送る途中に喫茶店でしばし歓談をしました。

ご婦人からご住職の講話を聴聞したがなかなか聞き取りにくかったとの話がございました。私が聴聞した感じで、(1)盂蘭盆会の起源について、盂蘭盆経というのが中国で作られた事。(2)釈尊の十大弟子の二番目神通力第一の目連尊者がなくなった母親の現在の様子を神通力で見渡したところ、地獄（餓鬼道に）の様相を目の当たりにした。(3)母親は生前に慳貪（我慢偏執、欲深い）の咎で餓鬼道に落ちたとの因縁。(4)神通力でもってその母親を救おうと、食事や水を与えるがそれが業火となって救うことができない。(5)その経緯を師匠の釈尊に救う相談を行う。(6)救う為にたくさんの僧

大石寺境内にある池田家の墓



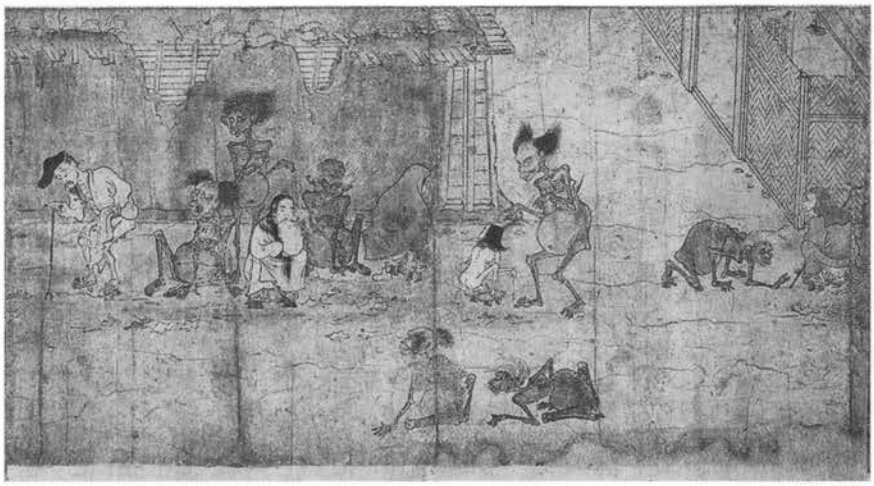
侶（無縁の衆生）を集めて供養をして救った。(7)最も大事なことは、僧侶とは、無縁の衆生を意味するが、その供養をすることが、自身の我慢偏執の心を解き放って、一切衆生を救うという志に目覚めるという法華経の精神に叶うのでないかという深い教えがあるという内容であったと私の解釈をお話し、疑問がございましたら直接ご住職にお聞きしていただければ有り難いですとお話しをしていて、正しく伝えていく難しさを痛感しました。

盂蘭盆御書には、釈尊の教えによって母親を救うことができましたが、それはわずか一劫の間、餓鬼道の苦悩を救ったに過ぎなかった。母親青提女の実際の成仏については、目連尊者が小乗の戒律二百五十戒を投げ捨てて、南無妙法蓮華経と唱え信受したことにより自身の成仏の功徳によって父母の成仏がなったという事が説かれています。

改めて自身の信心決定が一大事であって、その意味でも日興門流では常盆、常彼岸という修行観があるのだと思います。

「只須く汝仏にならんと思はゞ、慢のはたほこ(幢)をたをし、忿りの杖をすてゝ偏に一乗に帰すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだし(紲)なり。嗚呼、恥づべし恥づべし、恐るべし恐るべし。」

という一文がどういうわけか、目が覚めると頭の中に浮かび上がってきましたので、昨日の盂蘭盆会の事も含めて忘れないうちに文章にしてみました。名聞冥利、我慢偏執という四文字熟語を肝に銘じて精進していきます。



旧河本家本『紙本著色餓鬼草紙』第3段「食糞餓鬼図」

餓鬼草紙（がきぞうし、がきそうし）は、餓鬼道世界を主題とした、日本の絵巻である。「正法念処経」の説く、現世の「原因（所業）」に対する来世の「結果（応報）」が描かれている。　（ウィキペディアより）

恵日だより

盂蘭盆会法要

整備を終えた歴代の墓前でも読経

八月十五日（木）午後一時

八月七日の立秋も過ぎ、朝夕心なしか涼しい風が吹くようになったかと思われますが、日中は連日猛暑が続き、熱中症警戒アラートが出され、暑さが一向に収まる気配がない日々の中、十三日、十五日の両日、多くの方の参詣のもと盂蘭盆会の法要が奉修され、参詣された方々は、それぞれ亡くなられた方に思いを馳せられている様子でした。

お盆を前に歴代の墓所が整備され、今年は天候に恵まれて墓前で読経唱題が行われました

十五日の法要は、午後一時に出仕鈴が鳴り響く中ご住職が出仕され、献膳、読経と如法に進められ、寿量品に入ってご住職のご焼香が行われると、引き続き参詣者が順に焼香台へと進み、全員がお焼香をし、ご住職により懇ろにご回向がなされ、お題目三唱の後、ご住職より、盂蘭盆会に関しての講話があり、法要は終了しました。

本堂での法要終了後、三師塔前にての読経唱題に引き続き、お盆前に整備され綺麗になった歴代の墓前でも読経唱題が行われ、法要はすべて終了しました。

申し出のあったお宅では お盆の棚経も奉修されました

例年各家庭にお参りして行うお盆の棚経も、コロナ禍のために中断しておりましたが、昨年から再開されています。

しかし、まだ皆さんの家庭ではなく、今年も初盆の方をはじめ、申し出のあった家庭にのみお参りして各家精霊の追善供養を奉修し、それぞれ懇ろにご回向申し上げることとなりました。

＊御難会を奉修

九月八日（日）、同十三日（金）の両日、午後一時より、御講にあわせて、御難会が奉修されました。

大聖人の御一代において、頸の座という身命に及ぶ最大の難である、文永八年九月十二日に起こった竜口法難を期して、ご報恩申し上げる法要です。

＊秋季彼岸会を奉修

九月二十二日（日）、午後一時より、秋季彼岸会が奉修され、故人・先祖への追善回向がなされました。

＊目師会を奉修

十一月十五日（金）午後一時より、篤信の法華講員が多数参詣され、第三祖日目上人へご報恩申し上げることができました。法要後の講話では、日目上人の自筆の申状のコピーが配られ、住職から詳しい説明がありました。

＊南近畿法華講研修会を開催

～テーマは「語ろう信心」～

十一月二十四日（日）午後一時から、聖道寺本堂において第二十三回南近畿法華講研修会が開かれ、源立寺法華講からは十一名が参加しました。

河合美代子さん（伝正院所属）の司会で研修会が始まり、簗瀬明道師の導師で読経唱題、藤村道監師の先導により諸法実相抄の一節を奉唱。

藤村督理事長挨拶の後、青森県十和田市の覚宣寺住職吉田省道師から「私の貫いた信心」と題した講演をいただき、自らの歩まれた僧道、覚醒運動での様々な苦労話をお聞きしました。

休憩の後、今回の研修会のテーマ「語ろう信心」ということで4グループに分かれ、ご僧侶も各グループに2名づつ加わり懇談が行われました。

参加者は、常日頃思っていること、気になっていること、悩んでいることなどを話すことができ、ただ聞いているだけの研修ではなく、有意義な研修だったという感想が多く聞かれました。

予想以上に懇談が盛り上がり、予定時間をオーバーしてしまいましたが、坂口麗道師の閉会の挨拶の後、題目三唱をもって研修会は終了しました。

「案内・お知らせ」

＊成人式の御案内

本年度の成人式は、一月十三日（月）午後二時より、源立寺本堂において行います。今年成人式を迎えられる方は受付までお申し込み下さい。

＊今年の初お講は十二日（日）に奉修

十三日はお講を奉修しませんのでお間違いの無いよう、ご注意ください。

＊役員研修のお知らせ

今年の役員研修は、一月十九日（日）御前十時より行います。

今年度は、菩提寺建立等についても話し合われますので、役員の方は日程を調整されて、全員の参加をお願いします。

【訃　報】

〔兵庫地区〕宝塚市
眞淳院妙夏信女　七月三十日寂
俗名上治夏江之霊　行年八十五歳

〔槻木地区〕能勢町
宝清院厚心妙寿大姉　十一月二十七日寂
俗名中西きよ子霊　行年九十四歳

この度、右々の方がお亡くなりになりました。
謹んでご冥福をお祈りします。

【睦月詠草】

〔和　風〕

初めての同級会だと服替ふる
大学の娘にネックレスかけやる
前庭の草むしり取る我見つけ
高校帰りの息子が声かくる

【恵日俳壇】

〔農　婦〕

河童忌や父の書棚の「地獄変」
向日葵や村に若者就農す

〔森　秀之〕

あーしんど穂高へ辿る登山道
雲海の切れ間に浮かぶ笠ヶ岳
誰一人行き合うことなし登山道

〔故　吉田　裕〕

母の忌や街にすばやき揚羽見て
川底に貼りつく鮠や旱夏

恵日　一月号　通巻三五五号　令和七年一月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）年間二〇〇〇円

一月の行事

一日（水）　午前〇時　元朝勤行会
一日～三日　午前十時・午後二時　正月勤行会
七日（火）　午後二時　広基寺初お講
十二日（日）　午後一時　初お講・合同役員会
十三日（月）　午後二時　成人式
十九日（日）　午前十時　役員研修会

二月の行事

一日（土）　午後二時　お経日
二日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会
三日（月）　午後七時　節分会
七日（金）　午後一時　興師会
九日（日）　午後一時　お講・お誕生会・役員会
十三日（木）　午後二時　お講

令和七年　年回表

一周忌	令和六年		
三回忌	令和五年		
七回忌	令和元年	（平成三十一年）	
十三回忌	平成二十五年		
十七回忌	平成二十一年		
二十三回忌	平成十五年		
二十五回忌	平成十六年		
二十七回忌	平成十一年		
三十三回忌	平成五年		
三十七回忌	平成元年		
五十回忌	昭和五十一年		

令和七年一月号　通巻三五五号
令和七年一月一日発行
恵日
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
TEL（〇七二）七五一―三一三五
E-Mail　kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料（含送料）　年間二〇〇〇円
加入者名　恵日編集室会計
〒振替口座番号　01380-2-126649